

P18 化学療法・放射線療法が歯の形成に与える臨床的影響

Clinical influence of chemotherapy and radiotherapy on tooth formation.

○長谷川大子¹⁾、山本晋也¹⁾、稲田浩子²⁾、森下 格³⁾、稲田絵美¹⁾、
落合 聡⁴⁾、齊藤一誠⁵⁾、早崎治明¹⁾、山崎要一¹⁾

Hiroko Hasegawa¹⁾, Shinya Yamamoto¹⁾, Hiroko Inada²⁾, Tadashi Morishita³⁾, Emi Inada¹⁾,
Satoru Ochiai⁴⁾, Issei Saitoh⁵⁾, Haruaki Hayasaki¹⁾, Youichi Yamasaki¹⁾

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 小児歯科分野¹⁾

久留米大学 医学部 小児科学教室²⁾ 雪の聖母会 聖マリア病院 矯正歯科³⁾

雪の聖母会 聖マリア病院 小児歯科⁴⁾ 鹿児島大学病院 小児歯科

Department of Pediatric Dentistry, Graduate School of Medical and Dental Science, Kagoshima University¹⁾

Department of Pediatrics and Child Health, Kurume University School of Medicine²⁾

Department of Orthodontics St.Mary's Hospital³⁾

Department of Pediatric Dentistry St.Mary's Hospital⁴⁾

Pediatric Dental Clinic, Kagoshima University Medical and Dental Hospital⁵⁾

近年、医療の進歩により化学療法や放射線療法を受けた小児の生存率は増加している。しかし、これらの治療は、歯の形成や形態に影響を与えたのではないかと報告が散見される。このような影響は、歯根の発育異常、矮小歯、形成不全、晩期残存などが含まれる。その発現頻度は、化学療法を開始した年齢やプロトコール、放射線療法の有無に関連があると考えられている。

Minicucci¹⁾らは、急性リンパ性白血病で治療を受けた1歳～12歳の小児のうち、82.9%に何らかの歯の異常が認められたと報告している。その中で最も歯の異常の頻度が高かったのは、1～6歳の期間に発症した小児でかつ化学療法のみを行ったグループであった。

一方、Kaste²⁾らは、小児における急性リンパ性白血病の治療に放射線療法を施行した群と施行しなかった群で比較評価を行ったところ、放射線療法を施行した群の50%に歯の異常が認められ、施行しなかった群では25%にのみ歯の異常が認められたと報告している。

今回、このような国内外の複数の文献を紹介しながら、これらの療法により歯の形成・形態に異常が認められた症例を提示し、その障害の発生機序と小児歯科臨床の場で問題となるケースへの対応について考察したい。

参考文献：1) Minicucci EM, et al.: Leukemia Research 2003;27:45-50. 2) Kaste SC, et al.: Leukemia 1997;77:792-6.